

三陸の近景

9

変わらない支援を

「無念 今も変わらず」

これは、追悼式典で手を合わせる列席者の写真とともに掲げられた2014年3月11日付け地元紙の見出しの言葉です。

着実に復興への道のりを進めながらも、変わらない心情を表す「無念」という言葉は、被災された方の様々な気持ちを広く代弁しているのかもしれませんが。

全国的にも毎年3月は、震災関連報道が11日にピークを迎え、心静かに過ごすことは難しくなりました。実際に、訪問する仮設住宅でも「なぜ?」「どうして?」といったやり場のない気持ちや、沈痛な面持ち、言葉にならない感情が高ぶり、あふれる場面に出会うことがあります。



どうすれば、重くのしかかる変わらない「無念」を少しでも和らげることができるのでしょうか。それに取り組むいわゆる「こころのケア」は、様々な立場の人たちが試行錯誤しながら根気強く活動を続けています。

それでも多くの方が「復興」を実感できる段階に至るまで、長い

道のりになることは確かです。

近い将来への展望を語りながら「でも、あの子は死んじゃったから」と自らに言い聞かせるように語る方を目の前にすると、こちらの気持ちもまた揺れ動きます。

悲嘆の中にいらっしゃる方との関わりを大切にしながらも、振り返ってみると「何年経っても『無念』な気持ちを完全に取り去ることは難しいのではないか」という厳しい現実がどうしても頭をよぎるのです。

被災された方の自立や再建がうたわれる今後こそ、一層の支援が必要であることを強く感じます。

年度始めにあたり、あらためて1人でも多くの方に支援の輪に加わっていただくことと、できる範囲で気持ちを寄せ続けていただくことを読者の皆様をお願いしたいと思います。

(本願寺派総合研究所研究員・金澤豊)